

令和7年度第6回調布市地域福祉推進会議

議 事 録

令和8年3月26日（木） 午後6時半から

調布市文化会館たづくり 10階 1002学習室

【出席者】出席委員：16人（web出席を含む）（欠席3人）

2 事務局・関係部署出席

：福祉健康部（福祉総務課，生活福祉課，健康推進課，障害福祉課，高齢者支援室）

子ども生活部（子ども政策課）

3 傍聴者：0人

【議事次第】

- 1 市民福祉ニーズ調査報告書（案）について
- 2 重層的支援体制整備事業実施計画の改定について
- 3 その他事務連絡

【当日配布資料】

- ・資料1・・・市民福祉ニーズ調査報告書（案）
- ・資料2－1・・・アンケート調査から見えた課題
- ・資料2－2・・・住民懇談会から見えた課題
- ・資料3・・・重層的支援体制整備事業実施計画（改定案）

開会

議題1 市民福祉ニーズ調査報告書(案)

○事務局（委託事業者） みなさん，こんばんは。本日もよろしくお願いいたします。私から調布市民福祉ニーズ調査報告書のご報告をさせていただきます。まず，お手元にあります，この分厚い冊子は，前回の会議である程度ご説明させていただいたということで，今日はこのご説明はいたしません。こちらの分厚い冊子の最後のページに課題という欄を載せるものがありまして，316ページ，317ページだと思います。そこに掲載する予定の課題というものが，別紙として資料の「2-1」，資料の「2-2」として，今日，新しくみなさんに見ていただきますので，それを別紙でご説明いたします。

資料の「2-1」のご説明をしたいと思います。お手元にご用意いただければと思います。それではこの資料の「2-1」は市民アンケート調査の結果から，地域福祉を一層前進させるために必要な6つの考察をまとめたものです。

1 つずつご説明いたします。まず(1)の見出しといたしましては，「多世代・多様な主体の参加による，地域における支え合いの仕組みづくりを推進する必要がある」としています。その下にアンケートの結果の要点を4つにまとめております。1 つずつ，簡単にご説明いたします。

1 点目は親密な近所付き合いについてお聞きしました。それが結果として 3 割を下回る結果となりまして、近年では最も低くなっているという結果です。

2 点目ではこれまで地域を支えてきました持ち家の世代、あるいは高い年齢層の方、こういった層におきまして、地域との関係が若干弱まっているという結果でした。

3 点目です。災害時の助け合いの必要性を伺ったところ、それについては高い必要性があるという認識が、これまでと同様、維持されているという結果です。しかしながら、その一方で地域活動やボランティア活動に実際に参加している方というものは、それほど多くなっておらず、意識と行動の乖離が見られるという結果です。

4 点目です。支え合いを進める仕組みとして支援が必要な人と、支援ができる人、それをつなぐ仕組みへの期待が高くなっているということが分かりました。また、地域活動に参加しやすい条件を伺いましたところ、時間に縛られない、あるいは、身近な場所である、そういった点が重視されているという結果でした。

このアンケート結果をもとに、地域福祉を前進させるための方向性を考察いたしました。これが四角の枠の中になります。今の申し上げた結果から分かることとしては、1 つは日常的な地域のつながりが希薄化していること、もう 1 つは、従来の担い手だけでなく、多くの市民が助け合いの意識を持っておりますので、それを日常の活動につなげていくことが大切だと考えられます。

そうしたことを踏まえて、これからの方向性といたしましては地域福祉コーディネーターなどによって、地域づくりの支援をさらに強化していくという方向性が考えられます。具体的には新しい担い手の発掘、地域活動やボランティア活動などにいろんな方々、多世代、多様な主体が参加できるという、そうした取り組みをこれまで以上に進めるという方向性が必要だと考えられます。以上が 1 点目の考察です。

続けて 2 点目になります。見出しは (2)「複雑化・複合化した支援ニーズに対する包括的な支援体制の充実を図る必要がある」としています。

これに関するアンケートの結果の 1 点目です。経済的な理由で困った経験がある人は 3 割弱となっております。

2 点目です。現在、生活上の困り事を抱えている人も一定割合存在しております。そしてその理由を伺ったところ、主なものとしては、経済的な課題が多かったという結果です。

3 点目です。地域におきましては、老老介護やゴミ屋敷、地域と関わりを持たない世帯など、複雑な課題を抱えていると思われるケースを見聞きした方々が一定割合、存在しております。

4 点目は困り事の相談先です。これは家族、あるいは知人が中心となっています。

次のページにいきます。一方で公的な相談窓口ですが、支援機関の利用というものは限定的であることが分かりました。

こうした結果を踏まえまして、四角の枠に考察を載せております。まず結果から分かることといたしましては、経済的な問題をはじめとして、生活課題が複雑、あるいは複合している状況が見受けられます。もう 1 つは分野を横断して包括的に相談を受け止める体制というものが今後も課題になってくることが考えられます。そのため支援を必要とする人が適切な支援につながりやすくするために、多機関協働による重層的な支援体制の充実をさらに一層、進める必要があろうと考えられます。以上が 2 点目の課題です。

3 点目にいきます。(3) の見出しとしましては、「ハード・ソフト両面からユニバーサルデザイン・バリアフリーの取り組みを推進する必要がある」としました。これに関するアンケートの結果です。

1 点目です。市内のバリアフリーにつきましては充実していると感じる割合は各項目で微増しました。しかしながら、一方では充実していないと感じる人も引き続き存在します。

2 点目です。心のバリアフリーの普及に向けては、分かりやすく、使いやすい情報の提供、学校における理解と配慮を育む教育などが求められておりました。

3 点目です。共生社会に関する法律、考え方の認知度は残念ながら、まだ十分とは言えず、市が制定した条例についても内容を知っている人は1割未満となっています。

こうしたアンケートの結果から考察したことが四角の中になります。繰り返しになりますが、この結果から分かることとしては、市内のユニバーサルデザイン・バリアフリーの取り組みは進んではいますが、十分とはなかなか言えません。

もう1つは、共生社会に向けた制度、理念といったものの認知や理解の一層の浸透をはかる必要があろうかと思えます。こうしたことを踏まえて、今後というところでは、やはりハード・ソフトの両面からユニバーサルデザイン化、バリアフリー化の取り組みを継続的に進めることが1つ言えると思えます。

もう1つは年齢、障害の有無、国籍などにかかわらず、誰もが安心して暮らせる共生社会に向けた取り組みを、行政だけではなく、市民の方、地域の方、関係機関、市全体で連携して進めるというところが、やはりこれからも重要になってくるという考察でまとめております。

4 点目です。(4)「困難を抱える人を支える包摂的な地域づくりを推進する必要がある」と見出しに書きました。これに関するアンケートの結果です。

丸の1点目です。困難を抱える人や家庭を地域で支えることの重要性は高く認識されているという結果でした。一方で引きこもりやニートの問題につきましては、地域で支えることという認識が他の課題に比べると若干低いです。そういった意味では、課題によっては意識の差が見られるということが分かりました。

2 点目です。犯罪や非行をした人の更生支援です。再犯防止という言葉を使いますが、これに関する民間協力者や活動につきましては、保護司は一定の認知度はありますが、それ以外の協力者であるとか、活動については知らないとする割合が多かったという結果です。

3 点目です。こうした更生支援、再犯防止への理解、関心を広げるための取り組みについて伺いましたところ学校や職場での学び、あるいは多様な媒体による情報発信というものが多く上位にあげられたという結果でした。

こうした結果からわかることを四角の枠に書いております。まず様々な困難を抱えている人が、地域で孤立することなく暮らせる社会、こうした社会になるために地域や社会全体で支える周囲の意識を広げていくということが、やはり大きな課題になると考えられます。そのため市民一人一人が包摂的な地域づくりに対する理解を深める取り組みが必要になると書いております。

ここで少し補足させていただきます。「包摂」という言葉ですけれども、福祉に携わっている方々は、ご理解いただいているでしょうが、市民の方には少し分かりづらいところがありますので、補足させていただきます。「包摂」とは平たく言えば、あるものをそのまま包

み込んで受け入れるといったような言葉です。包摂的な地域づくりとした意味は異なる意見や立場、あるいは年齢、障害の有無、国籍、社会的弱者と言われる立場の人、マイノリティなども含め、誰でも受け入れる、そういった意識が広がる地域ということで包摂的な地域づくりと、ここでは書いております。

(5) です。(5) の見出しとしては、「社会的孤立や生きづらさを抱える方の支援の充実を図る必要がある」としました。

1 点目の丸は、自分は孤独であると感じる「主観的な孤独感」です。これを聞いたところ国と比べて低い水準でした。

2 点目の丸は「孤独感尺度」です。この主観的な孤独感を間接的に測定する方式ですが、それを出したところ、こちらも国と比べて低い水準でした。しかしながら、孤独感はある特定の年代に限ることなく若年層から中年、高年層まで幅広く見られました。これは国も同様です。

3 点目の丸ですが、同居していない家族や友人との社会的交流、コミュニケーションの頻度です。「全くない・できない」という回答した人の割合も一定数存在しております。

4 点目の丸です。引きこもりに該当する可能性のある方を割り出したところ広義の引きこもり、それから狭義の引きこもりがともに一定数、存在するというのがこの調査では分かりました。表のページがまたがってしまっていて恐縮ですが、3 ページの下から 4 ページです。4 ページの一番上が調布市のもので、左側が広義で 3.03%です。右側が狭義で 1.52%という結果でした。

その下の丸にいきます。ご自身ではなくて、市内居住の家族について、そういった引きこもりに該当するかどうかという状況を伺いましたところ、それにつきましても、広義、狭義ともに一定割合あったという結果でした。これにつきましては、国は調査しておりませんので、調布市だけの結果ということです。

こうしたアンケートの結果を踏まえまして、四角の枠で考察したことが書いております。この結果からは、孤独や孤立というのは、特定の年齢や属性に限らず、誰にでも起こり得ることだということが 1 つ分かると思います。そして社会的な孤立あるいは引きこもり状態にある人は調布市民の中でも一定数存在していると考えられます。地域福祉としては、このことを課題として認識して対応することが求められていると思います。

そうしたことを踏まえて、今後の取り組みのあり方としましては、まずは人とのつながりを感じられる機会、あるいは居場所づくりというものを進めることで、孤立を防ぐ地域づくりを進めていくことがあると思います。また、地域住民の方、あるいは関係機関ができるだけ早い時期から関わりを持ち、本人や家族の状況に応じて、いろんな機関が協働して社会への参加を支援する、応援するといった取り組みも必要になってくると考えられます。

最後に 5 ページになります。(6)「誰もが自分らしく暮らせるよう、権利擁護支援の取組を推進する必要がある」という見出しをつけました。

アンケートの結果ですが、1 点目の「成年後見制度」、「法定後見制度」の認知度は少し増加しました。しかし、一方で他の制度や事業はまだ十分に浸透しているとはいえません。

2 点目です。制度や事業の利用意向は 6 割を超えて、一定数あります。しかしながら、分からない、利用しないとする人も 3 分の 1 程度、存在しております。

3 点目の丸です。この 3 分の 1 ほどいらっしゃる、利用しない、または分からないとした方々に理由を伺いましたところ、「制度の内容や利用方法が分からない」というものが最も多かったです。続いて、「家族に支援してもらいたい」、「第三者に任せることへの不安」ということも、理由としてあげられております。

こうした結果から考えられることが枠の中になります。この結果から制度や事業についての利用意向はありますが、認知や理解がまだまだ十分ではないということが分かります。また、第三者にそうした支援を任せることへの不安感というものはありますので、それを払拭していくことが課題だと考えられます。

ですので、今後の取り組みとしましては、まずは制度や事業の意義、あるいは仕組み、利用方法などの認知、理解を深める取り組みが必要になります。また、相談しやすい体制の充実、関係機関との連携の強化によりまして、本人が利用したい、あるいは何かしたいという本人の意向に沿って適切なタイミングで制度を選べるように権利擁護支援の取り組みを進める、そういった環境がさらに必要になってくると考えられます。当然これからの社会は高齢化がもっと進みますので、やはりこういった権利擁護の部分は今以上に必要になってくる取り組みになろうかと思えます。以上が市民アンケート調査の結果から考察した 6 つです。

この 6 ページ以降に高齢者のアンケート、それから障害者、あるいは障害児保護者のアンケートから、それぞれ考察したものも掲載する予定です。今日は時間の都合でご説明は省略させていただきますが、また、内容を読んでいただきまして、この場、あるいは後日にご意見シートでも結構ですので、ご感想ですとかお気づきの点がありましたら、お聞かせいただければ幸いです。

その次に資料の「2-2」です。懇談会からの意見でまとめた考察の内容をご説明いたします。これも、先ほどの分厚い報告書にありました、アンケートの結果の考察の次の最後のページにこの懇談会のまとめを掲載する予定です。

住民懇談会、委員の方もご参加いただきまして、ありがとうございました。懇談会のテーマとしては、誰もが地域で支え合い、安心して暮らすためのつながりはどんなものか、あらためてつながりを考えてみましょうということでした。このテーマにつきまして、つながりを 3 つの視点で話し合いをしましたので、その視点ごとに意見と、これから必要なことを取りまとめております。ですから、まとめは 3 つということになります。

1 点目の視点として、「つながりがあってよかったこと」はどんなことですかということを、懇談会では 1 つの時間を設けました。そこに対していただいた意見をまとめたものが (1) です。見出しとしては、「「つながり」を広げることで地域における支え合いの基盤の整備を推進する必要がある」としました。その下に懇談会の主な意見をまとめたものを 4 つあげています。

1 点目の「つながりがあってよかったこと」です。参加者の体験といたしましては、自治会、地域のイベント、子供食堂、サロン、ボランティア、市民活動といった集まれる場が人と人とのつながりを生み出しているということを実体験としてご意見いただきました。

2 点目の丸です。挨拶、見守り、日常の声掛けなどによってお互いの信頼関係が育まれていて、防災や災害時の助け合い、困り事の早期の相談にも、それが繋がっているというご意見をいただきました。

3 点目の丸です。同じ悩みや立場を共有することができたので、自分だけではないと感じられるなど、生きがいや前向きな気持ちに繋がったという意見をいただきました。

4 点目の丸です。民生委員、社会福祉協議会、関係機関、こういった様々なところとの顔の見える連携関係を築くことで、孤立を防ぎ、必要な支援につながる環境が作られているというご意見をいただきました。こうしたご意見を踏まえて、これからつながりをより広く、より深くしていくための考察を四角の枠にまとめております。

まず、つながりが地域の支え合いの基盤となっていることがご意見から分かったと思います。そのため、今後の方向性として、人と人が出会い、関係を築ける場、あるいはきっかけなどを一層充実させていきます。そして一方で挨拶、見守り、支援機関との連携、そういったことも進め、つながりや連携が自然に生まれていくような環境を目指すことが求められるのではないかとこのようにまとめてあります。

次に 2 点目です。(2) ですが、住民懇談会では地域とつながらない状況を考えてみましょうということで時間を設けました。それに対して意見をいただきましたので、それをまとめたものが (2) です。見出しとしては、「地域と連携して、「つながり」がない状況を生まない取組が必要である」としました。

丸の 1 点目です。地域とつながらない状況というものは、人との関係が切れることはもちろんですけれども、プライバシーの意識、忙しさ、そもそもつながる必要を感じないといったような価値観などのさまざまな要因によって、そういった状況が生まれるという意見をいただきました。

丸の 2 点目です。人との付き合いの負担感、あるいは心身の不調、忙しいなどのことによって、住民同士の顔が見えない状況が調布市の中でも広がっているという意見もいただいております。

丸の 3 点目です。結果として、相談先がわからず、支援や情報につながらないまま、困り事が深刻化する、あるいは災害時の不安が高まっています。また地域活動の担い手や活動の縮小によって、人と出会う機会がそもそも減少しているといった現状も聞かれたところです。

丸の 4 点目です。コロナ禍、あるいは防犯意識が高まりました。高まったことは良かったのですが、反動として、挨拶や声かけが減少し、孤立が加速しているという点もあるのではないかと指摘もありました。

裏の面です。こうした意見から分かることを四角の枠に書きました。まず、つながりの希薄化により孤独、孤立が進み、支援につながりにくい状況も見られます。地域の活力低下や生活関係の影響といったものも懸念されているということが言えるかと思います。そのため、今後としては、地域住民との連携、孤立を未然に防ぐ取り組み、つまりはつながりがない状況を生まないような地域づくりが必要になっているというようにまとめています。

最後の 3 点目です。この 3 点目は住民懇談会で地域とつながらない状況をなくすために、どんなきっかけや取り組みができるかといった視点で話し合いをしていただきました。その意見をまとめたものが (3) です。見出しとしては、「多様な手段により、「つながり」が継続する取組が必要である」としています。

まず丸の 1 点目です。つながらない状況をなくすための取り組みとしては、相談先や支援内容を分かりやすく見える化すること、多様な手段で情報を届けることといった取り組みへの意見があげられました。

丸の 2 点目です。挨拶や声かけ、見守りなど、日常の小さな接点を積み重ね、SOS を出しやすい地域づくりをすることも自分たちでできる可能性のある取り組みだという意見をいただきました。

丸の 3 点目です。食事会、体操、イベントなど、そういった多様な地域の活動、あるいは居場所を通じて、多世代が自然に交流できる環境づくりが地域で行えればとてもよいということです。できればその際に空きや公共施設などを活用したいというアイデアもいただきました。

丸の 4 点目です。学校をはじめ、様々な関係機関との連携により支援が必要な人を早く発見、把握し、適切に関係機関につなぐ体制づくりの必要性があげられたところです。あわせて、支援時のリスク、あるいは負担というものが過度にならないような配慮というものも必要だという意見をいただきました。

こうした意見から分かることとしては、つながりを特別なものではなくて、日常の中で、そういったつながる間口を広げることの必要性、重要性というものが意見としていただいています。そのため、今後といたしましては多様な情報の発信はもちろんのこと、居場所づくり、あるいは支援を地域と関係機関が連携して、一体的、あるいは分野横断的に行うことによって、地域や社会への参加を継続的に支える仕組みづくりというものが必要になります。今も進めていらっしゃる場所ですけれども、これまで以上に必要になるということが分かったと思います。

以上、ここまでの懇談会からの意見を踏まえた考察です。先ほどの市民のアンケートと同様、お気づきの点やご意見がありましたら、この場でもご意見シートでもお寄せいただければと思います。私からの説明は以上です。ありがとうございました。

○会長 ありがとうございます。ただ今の説明について、ご質問やコメントがありましたらお願いいたします。アンケート調査から見えた課題と、住民懇談会から見えた課題、それぞれ整理してお話を伺いました。まず、ご質問がある方はいらっしゃいますか。それでは感想なりご意見なり発言いただければと思います。いかがでしょうか。手を挙げていただければマイクを持っていきます。

○委員 地域福祉コーディネーターをしております。アンケート調査及び住民懇談会のところは本当に日頃、地域福祉コーディネーターとして大事にしているキーワードがたくさん詰まっているということが1つです。

あと一点、アンケート調査から見えたという資料「2-1」の3ページから4ページにかけてのところでは、(5)の「社会的孤立や生きづらさを抱える方」というところで、地域福祉コーディネーターとしても、活動報告書等で多く取り上げてきております。

4 ページの四角い括弧の中で、この内容はその通りだと思うところに加えて、私自身の個人的な意見も含めてですが、生きづらさを抱えるとか、ひきこもりというテーマを記載する

にあたって、生きづらさを抱えるというところが個人的な要因ではなく、社会が様々な生きづらさを価値観の中で生ませてしまっているところがあります。

そのため生きづらさを感じて、何かしらひきこもりの状態になってしまうケースもたくさんありまして、家族会の中でもそのような声をいただくので、内容として、何かしらの地域活動、地域づくりに対する理解というよりかは、そもそも生きづらさを作る社会的価値観の多様性を理解するということが必要だと考えます。

様々な方々が何かしらに理解するという表現を入れていただくと、おそらく、もし生きづらさを抱えている方や、引きこもりで悩んでいる方が、これを読んだ時に何かしらそこに焦点があるというところは少しプラスになるかと思います。

考察のところなので、全くとんだ意見になるということも理解はしているのですが、こういったセンテンスを取り扱う場合に、個人的には社会が作る生きづらさに対する理解という文言を、もし可能ならば入れていただいたほうが当事者の方々にも伝わるかというように思った次第です。私からは以上です。

○委員 今このアンケートの(4)の「困難を抱える人を支える包摂的な地域づくりを推進する必要がある」というところに、再犯防止のことが入っています。再犯防止も非常に大事ですし、私もそれについての活動もしているのですが、いろいろな困難を抱えている人と言った時に、最初にこのことについての内容から始まるのではないような書き方のほうが私的にはしっくりくると感じました。

○委員 私は専門的なことは分からないのですが、この住民懇談会から見えた課題というものが、より身近でリアルな感じがしまして、一番思ったことは最後のつながりというところですね。特別な活動ではないということに、非常に身近な感じがしまして、つながりを持つということが日常的なことであるというような感じですね。

ただ、つながりというものは非常に距離感が難しいなと思います。つながりを持つと思う人が距離感をうまく保たないと、非常にプレッシャーになることもあるのではないかと感じました。ただ、この特別ではないということに非常に印象深い思いを持ちました。ありがとうございます。

○委員 私は主任児童委員ですので、児童のことを、主に普段から考えています。

まずこのアンケートでも、つながりを持つことが大事ということが、本当に当たり前というか、それがもう一番だろうということで、納得の内容だという感想です。ただ、つながりをどのように持つのかということを今ここにいらっしゃる各団体がそれぞれ考えて、またさらに今以外のところで考えていかななくてはいけないのですが、そこがなかなか悩ましい思っているところです。

私の場合は子供を持った保護者等がなかなかつながりを持つところがないところで、どのように困窮している方たちが分かるというか、そういったところからつながりを持っていくのかということを常々、考えています。先ほど、最後の懇談会のほうで、学校やPTAなどの繋がりも社協とか全体でということがあったのですが、この福祉に関わるというものがどこまでを指しているのかなとことをいつも思っています。

例えば特性を持っている子たちとか、そういったことが今、学校内では割と問題になっています。いろいろな授業を受けられない等のことで支援が必要だというようなことが、学校内だと問題です。

あとは不登校などもありますが、そういったことはここの福祉の中には含まれているのか、いないのかということが常々思っています。それはまた別で、例えば児相の問題で、調布ですと「すこやか」や、あとは教育委員会など、そういったところに関わっているので、それはまた別だと考えるべきなのかどうなのか分らないです。以上です。

○委員 なかなかこの会は時間が合わなくて、あまり来れていなかったのですが、いくつか今日のアンケート調査のご報告から思うことがありましたので、感想を言いたいと思います。

最初のところで、緊密な近所付き合いをしている方が3割を下回って、ただ何かをしたいという気持ちを持っている方はいるという話がありました。こういった中で、新たな担い手の発掘、参加につながる取り組みを進めていくことが必要であるというご意見でした。

これはもうまさしく、おっしゃる通りなのですけれども、実は私たちの医療界というものは、有効求人倍率が5倍とか10倍などで、人手不足が非常に激しいです。おそらく府中のハローワークの担当域でも1.1を超えているので、やはり人手は足りていないエリアです。

ご存知のように、日本のGDPというものは世界4位ですけれども、1人当たりのGDPでいくと、世界40位です。そうするとたくさんの方が働いているから、今の日本の経済が維持できているので、そういう中で、ではどうやって新たな担い手を発掘していくかということは今後の日本の情勢を考えると、なかなか難しいところがあります。

今はこのニーズはまさしくあって、こういう気持ちで発掘をしていって、つながりを作っていくということは重要なのですが、このニーズから何年先を見て、私たちは次の計画を立てていくかということです。そのあたりの、どこを見て計画を作るのかということももう少し行政の方が整理していただけると議論がしやすいということがあります。

あともう1つは先ほど、2ページの一番下のところで、困難を抱える人のことで、いきなり犯罪や非行した人の更生支援というものが出ていて、私もこれはすごく違和感がありました。困難を抱えた人たちはすぐ犯罪のほうにいきやすいというような認識を持っている感じになってしまうので、これはやはり言い回しを上手にやっていただけたらいいと思いました。以上です。ありがとうございます。

○委員 お久しぶりです。資料「2-2」の件ですけれども、つながりをまた別の面から申し上げたいと思います。

私は沖縄生まれなのですが、足のリハビリの関係のために帰りました。そうしましたら最初、兄弟などがみんな助けてくれまして、そしていとか、はとか、それから友達など、いろいろな方たちと話をしながら、こういう考えもあったなとか、こうすれば勇気が出たなということを、いっぱいもらってきました。

ですから、つながりというものは、小さいところからでもよいので、やることによってさらに地域つながっていくと思いますので、根気よく話をすることが必要です。電話やラインではなくて、顔を見ながら話をすることによって表情も分かるので、素晴らしいなと今回強く感じました。

それと同時に兄弟のいろいろな意味での協力を得て、かなり歩けるようになったのですけれども、にここに帰ってきましたら、寒さでまた杖になりました。2 か月間は杖を使わずにやっていたのですけれども、やはり地域差もあるということも痛感いたしました。他愛無いことで申し訳ないです。

もう1つだけあります。ハードとソフト面からなのですが、先だって昨日、卒業式がありまして、子供たちの様子やいろいろなことを見て、久しぶりに嬉しい気持ちがありました。やはり学校のほうもソフト面もハード面も考えるように教育委員会も頑張ってもらいたいということを感じましたので、どうぞよろしくお願いいたします。以上です。

○委員 これを見て、いつも疑問に思うことは、全国的な調査は一体どうなっているのかということです。調布市はこういう形で調査されていると思うのですが、それが例えば東京都ならばどうなのかと思います。それをどの辺りまで広げるのかということは分からないところがあるのですけれども、そういうところで調査したものとも比べてみたいと思っています。失礼しました。

○委員 非常に勉強になる点が多く、ありがたいと思います。引きこもりの点はかなり関心を持って拝見しました。保健所は精神や難病などの医療依存度が高い方々を中心に支援していますが、そういう方々は課題が複合化していて見えにくく、ご本人やご家族だけで抱えがちな状況があります。地域のつながりの中で支え合うという意識が少しずつ醸成されているという点は、私たちにとっても希望だと受け止めています。引きこもりは、学校の不登校から、高齢の方々が外出しにくいというところまで、かなり広い年齢層で起こる事象なので、地域の方々のご指導をいただきながら力を尽くしていければと思いました。

○委員 今回のこのアンケートの調査から見えた課題ということで、親密な近所付き合いをしている方が近年で最も低い水準になっているというところは非常に重要なところです。

あとは、このつながりのところで、高齢になってくると、やはり近所付き合いなどもあるかと思うのですけれども、今の若者はSNS でつながっていて、顔も知らない人と繋がっています。それがつながりというところで、10 代、20 代の子たちが大人になっていくにつれて、人に対して興味を持たなくなってくるといことで、今後こういうものが心配になってきます。

人に興味を持って人とのつながりが持てるようなきっかけをどのように作っていくかが今後の課題なのかと感じました。

○委員 今回このつながりというところで、私もいろいろと考えるところがありました。私は高齢者の分野で仕事をしているのですけれども、やはり今は経済的な問題や孤立の問題をいろいろと対応しています。どうしても高齢者の分野の方たちだけで話しをしても、なかなか進まないところもあるのですけれども、他の分野の社協さんなど様々な方とつながる中でいろいろと考えるところがあるかといつも思っているので、やはり各機関との連携というところでのつながりというものも大事だと思いました。

○委員 この調査のまとめを読ませていただいて、難しい言葉もなく、課題もはっきりしていて、とても分かりやすく良かったと思います。懇談会の課題のまとめの 2 ページにある (3) の丸の 2 番目についてです。「あいさつや声かけ、見回り、ロコミといった日常の小さな接点を積み重ね」というところは、私も毎日やれることだと思いますし、こういうことがみなさんに浸透して、みんながこういう気持ちでいれば積み重なって大きな力になると思うので素晴らしいと思いました。私も早速、気をつけて、実践していきたいと思いました。以上です。

○委員 ご説明ありがとうございます。他の委員の方が言っていられましたが、とても的確にまとめてくださっていて、かつ、表現も誰が読んでもスムーズに分かるようなものを使っていたっていて、その点も素晴らしかったと思います。

調布市としては近所付き合いが減ってきてはいるのだけれども、しかし、孤独を感じている人は国の平均よりは少ないということで、おそらく近所付き合い以外の関係性を豊かにお持ちである方が多いということになるのかと思います。

ただそれをもって、地域での関係性があまり重要ではなくなっているというわけではないと思っております。これまで近所付き合い以外のところで、例えば職場の関係性であるとか、そういったところで人付き合いがあったとしても、足腰が弱ってしまったとか、怪我を受けてしまったとか、経済的に困窮してしまったとか移動に制約ができると、途端に孤立してしまいわからないような構えというものも必要になってくるのではないかと思います。そういう意味では地域で多様な居場所があるということが重要になってくると思います。

特に福祉であるとか、あるいは交流ということ进行全面に出さないということも、非常に重要だと思っています。例えばサロンなどですと、そういったところに行ける方ももちろんいらっしゃるって、その方たちにとってはとても貴重な居場所なのですけども、そうでない方にとってはなかなかそういったところには行きづらいという方もいます。

特に現に孤立をされている方には多いかと思いますので、福祉とか、あるいは交流をするということ进行全面に出さないような場も合わせて、私たちは考えていく必要があるのではないかと思います。

あとは資料「2-2」の最後のページの丸の 4 点目です。空き家や公共施設など地域資源を活用するというようなご提案をいただきまして、それは非常に重要だというように思って聞かせていただきました。居場所の活動をするためには、人が集まる場というものが、ハードとして必要になるということかと思っています。特に住宅街などだと、なかなかそういった場が確保できないというようなこともあろうかと思いますが、こういったものを活用することによって住まいに近いところで気軽に立ち寄れるような場所を作り出していくことができますので、そういうことは非常に重要だと思っています。

私自身はここ 10 年ほど調布市内の大規模な都営住宅の団地で調査をさせていただいているのですけれども、公営住宅には集会室や集会所があります。あれは本来、入居者の方々の親睦を深めるためにあるわけですけども、その発想を少し変えて、外部の人も集まれるような空間、地域のハブのような存在として捉え直すという観点も有効ではないかと思っています。

実は公営住宅の集会室はほとんどが、自治会の方々が自主的に管理されているのですけれども、高齢化も相まって今、非常に管理が大変になってきています。調布ではまだないかと思いますが、都営住宅の団地では、自治会がもう解散をしているようなところも出てきて

いるのですね。そういうように考えますと、集会室の管理をどのような形でサポートをしているのかということも重要な課題になろうかと思います。

先駆的な事例ですと、オンライン上で集会室の予約を外部の人も含めてできるようにすることや、あるいは土足が厳禁のところが多いのですけれども、もうこれを良しとすると、そのような取り組みがあります。例えば、毎回ボランティアの方がイベントのためにブルーシートを敷いて、それをまた丸めてということは、実はとても重労働なのですね。あるいはご高齢の方が土足厳禁だからといって、集会室の入り口で靴を脱いだりすると、そこで転倒のリスクが高まるというようなこともあります。

そういった集会室の管理運営に関しても、必要に応じて社会福祉協議会の地域福祉コーディネーターの方を中心としてサポートに入っていくというようなことも、場合によったら必要だと思います。団地に住んでいる方だけではなくて、近隣の住民も含めて大きなメリットになり得るのではないかと、そのようなことを考えながら聞かせていただきました。非常に貴重な様々なご指摘、データに基づくぶん、とても説得力がありました。どうもありがとうございます。

○委員 私も今、川村先生の話をついて、本当にそうだなというように感じています。少しまだ意見が止まっていなくて、すみません。

報告の中で委員からお話がありましたけれども、私が以前に研修を受けた際には孤立と孤独の違いの話をされたことがあって、この人は社会的孤立をしているのか、孤独なのかというところの視点の違いがありました。割とその研修の中では、例えば好んで孤立している方がいたとして、そういう方々はサロンとかには行かなかたりするのですけれども、自らがそう思っていないとか、それを希望している場合は孤立してしまう状況に陥ってしまうことがあります。そういった方々を地域社会が見守る体制であるとか、1人にしないというところが重要だということがこのアンケートを見て改めて振り返る機会となりました。ありがとうございます。

私は障害分野に携わっているということもありまして、今回のこの報告の中で2点、これを機会に分析したいと思ったのが、調査まとめの資料「2-1」のです。まず資料「2-1」の11ページです。障害がある方の自立と暮らしを支えるというところのアンケート結果で、やはり最初の3の(1)の知的障害では家族等の同居やグループホームを希望する割合が高いということですが、これは、おそらく知的障害の方の特性上、判断とか管理とか生活のスキルなどというところで、やはり同居であるとか、グループホームを希望されるだろうということがイメージつきます。他の障害をお持ちの方は「ひとり暮らしや配偶者との同居」などとあったので、まさにこれは障害別、種別の特性が出た結果なのではないかと感じました。

12ページの上の段にあります、この障害児のところの就労というところで、上から3点目の丸の「将来の進学」のところですか。やはり一般就労のことがすごく書かれていたので、なるほどと思ったのが職場の理解であるとか、協力、それから相談体制などが重視されているということが非常によく分かりました。

一方で私が企業さんとの就労支援も20年近くやっていることもあって、障害をお持ちの方の企業就労支援をしている機会があるので、そこで言われているのが仕事の習慣ですとか対人スキル、それから認知スキル、あとは作業遂行能力のようなどを重視しているところもあるので、その辺りを知ってもらう機会が必要だと非常に思いました。

知ることの大切さとか、具体的に知る機会をどういうところで持つのか、先ほどの見守りの話もそうなのですけれども、そういう機会は大事だと改めて認識させていただきました。アンケートをどうもありがとうございました。

○委員 私どもの公益連絡会は社会福祉法人になりますので、保育園や高齢者施設、障害者施設等の社会福祉法人が集まっている団体になります。先ほど渡辺さんがお話ししたようなこと重複するのですけれども、私は障害の分野で関わっていて、以前、調布市内でグループホームを作ろうとした時には、やはり地域の住民の方の大反対にあって頓挫しました。こういった私たちの団体で必要なことを何か取り組もうとした時に、それぞれの立場でまた違う答えが出てくるということを多々感じているところです。

今回アンケートのほうをいろいろとされて、私もこういったことが必要だとか、地域の中で何かしらできればよいという関心があるから、やはりこういった答えが出てくると思います。また、アンケートも関心があるから答えていただけているのかと思っております。

その中でお話もあったと思うのですけれども、やはり日常の小さな接点とか関わりなどの中で、SOS であるとか、あとはこちらが気づいた中で見守りなど、押し付けにならない形でどう支えるかというところの立場の違いで答えが違ってきます。こちらは支えたいけど、支えてほしくないとか必要ないという方もいらっしゃいます。

ただ、見守りの距離とか、そういった難しさの中で、私は何ができるのかということを経験して、改めて感じながら、押し付けにならない関わりができればよいということを今回のアンケートで感じました。以上です。ありがとうございました。

○副会長 いろいろと所用があつて、しばらく対面で来なかったもので、すっかり忘れられていると思います。画面の向こうにしかいませんでしたが、今日は久しぶりに来ると、やはりだいぶ感じが違うので、二次元で捉えるのと三次元で捉えるので、違うということを改めて再認識した次第です。

このアンケートの調査については、特段に申し上げることはなくて、なるほどと思うところが多いという感じです。ただ、こういうきちつとした、データでお話を進めていただけるので、空理空論ではなくて説得力があるという感じがしています。

いくつか気がついたことを言えば、孤立、独特というものをどう考えたらよいのかということです。よく出てきましたものでは、孤独死と孤立死はどこが違うんだという話が当初よくありました。大変、残念なのですが、孤立死をしてもう何か月もの間、見つからないでお亡くなりになると悲惨なことになりまして、これは人間の尊厳の問題になります。私の理解では孤独死というものは誰にでも訪れるものです。残念ながら、夜に寝ている間にお一人暮らしで、亡くなれば孤独死ですね。誰もが病院なり、自宅なりで愛する妻と子供に手を握られながらあの世に行くということではないので、孤独死というものは起こり得ます。

問題なのは孤立死です。孤立死というものは、結局、地域社会の中で全く孤立していて、つながりがないということで、したがって何か月も見つからないというようなことが起こります。そのため孤立死を防ぐために、人と人とのつながりを作ろうとか、それから居場所を作ろうとか、そういうことになってきました。

それが様々な問題を引き起こすということがよく認識されてきたので、国も孤独、孤立の調査をやったりするようになりました。それを支えるためには、やはり地域というものが大事で、地域でどのようにつながりを作るかということだというのが、だいたい今の結論です。

つながりを作るのは、どうすればいいかというと、やはり居場所を作ってつながっていくことなのだろうと思います。居場所を作るということは、地域福祉がやることだということで、こういう調査が出てきているのかと思います。調布はそういう意味では、つながりは弱いというような結果が出てきているのですが、ただ、問題はつながりとは何だろうかということとして、それをもう1回、問い直す必要があると思います。

先ほどどなたが言っていましたけれども、若い人たちはネット上でつながっていきます。つまりバーチャルコミュニティというものが存在しているので、そのバーチャルコミュニティとリアルなコミュニティとの関係というものはどうなっているのかということがあります。

本当に昔なのですけども、仙台のほうで私も関わって調査したのですが、それは結構、トレードオフの関係になっているようです。つまり片方が上がると片方が低くなるというような関係があります。みなさん、ネットをやっていると別に寂しくもなく、しかしリアルではほとんどつながりがなくて、家に引きこもっているというような結果が出ています。孤独や孤立の感じ方というものは、ずいぶん人によって違うと思いました。

それから世代論でいうと、若い世代はそういうようなネット上でのつながりを持ってきているので、これからそういうつながりとか、そういうものが変わっていく可能性があるというように思っています。いつも集会所で、リアルな世界で対面になってお話をするというようなことにはならなくなってくると思います。とりわけそれがいわゆる新型コロナの時にかなりはっきりと日本の社会に突きつけられたと思っています。問題はつながりというものが変質してくるということです。

あとは、もうかなり古くなってしまいましたけれども社会学者でグラノヴェッターという人がいるのですが、弱いつながり、強いつながりというものを紐帯という言葉で表現して、かなり実証的なデータで明らかにしています。

つまりそれは何を言っているかというと、つながりは弱くてよいのだということです。つながるということを、べったりと、いろいろな個人的なことも相談できるような深いつながりを作っていくことが大事だと、多くの人は考えるわけです。実際にはいろいろなデータを見ると、少し顔を知っていると、軽いつながりをたくさん持っている人のほうが実はいろいろな生活上の問題を解決やすいし、強いつながりになりやすいということが、かなりはっきりとしています。そういう意味では、軽いつながりをたくさん持っているということは意外と重要です。そういうことですので、そういう場をたくさん作るということが大事なのかと思っています。

私も高齢者になって、もう今までのいろいろな付き合いを全部、清算しようかと思っています。年賀状も出さなくなってしまったのが、少し失敗したと思いました。年賀状も実は大事でして、いろいろなお付き合いを広げておいたほうがよかったのですね。

グラノヴェッターが例を挙げているのは、転職などでは軽いつながりのほうがよく話ができるそうです。ですから顔を売っておいたほうがよいということなのですね。深い関係のところから、だいたいよい転職の話はこないわけです。

そう考えると調布も戦略を変えて、軽いつながり、よい意味で軽薄なつながりを、これから増やしていくことも大事なのかと思います。

○会長 ありがとうございます。データ、あるいは実際の意見、調査に答えてくださっただけではなくて一人一人が書いてくださっているものも結構あって、そういう部分をうまく取り入れながら整理していただいたと思います。

つながりといってもつながりたいなどと強く言うと、みんな引いてしまうということで、この距離感が重要だという発言がありました。こういう微妙なところもあるわけですね。ただ、私は孤独が好きだという人でも、半年もすると、もういてもたってもいられないという人もいます。やはり軽くてよいですし、あるいは短くてよいですから、社会的な何らかのつながりがあるような状態が必要だと思います。

ですから、社会的な孤立状態はとにかく作らないようにして、だけど、つながり方そのものはいろいろやり方があってよいし、あまり深くやろうと考えなくてもよいのではないかと思います。むしろ SNS を使ってもよいし、いろいろなことがあってよいというように、少し考える必要があるのかもしれないということが、だいた議論になったと思います。これは次の計画作りというところで、おそらくこれからのやり方というものは少し考えていくことが必要になるかもしれません。

あとは、この調査結果のまとめという点でご意見は他にありますか。もし、なければみなさまのご意見をなるべく反映するようにしてまとめていただくことになると思います。質疑はこれで終わりますが、本日の会議が今年度最後の会議になりますので、ニーズ調査報告書について議論するのも本日が最後になります。今後の最終調整につきましては、事務局に一任をさせていただきたいと思います。または、重要事項に関わる内容であれば、私の事務局とで協議をさせていただくということで、みなさまから一任していただければと思いますが、いかがでしょうか。よろしいですか。ではありがとうございます。ご承諾いただけたということですので報告書の最終調整について、今後、修正が必要になった場合には、事務局と私で進めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

次に議事の 2「重層的支援体制整備事業実施計画の改定について」です。これを事務局から説明をお願いいたします。

議題 2 重層的支援体制整備事業実施計画の改定について

○事務局 それでは重層的支援体制整備事業実施計画の改定について、福祉総務課から説明させていただきます。お手元に資料の 3 番をご用意ください。

調布市重層的支援体制整備事業を実施計画は令和 6 年度からの地域福祉計画に包含する形で策定しております。また、地域福祉計画の重点施策と整合を図っており、重層的支援体制整備事業として位置付けている様々な分野の事業を体系的に取りまとめた実施計画となっております。この重層的支援体制整備事業実施計画の記載内容について今般、国が考え方を新たに示しており、策定当時は任意の記載項目とされていた事業の実施目標や事業評価の手法、プロセス等について、計画に明記することが、社会・援護局関係主管課長会議の資料や、国からの通知上でうたわれています。

こうした状況を受けまして、現状の記載状況では不足があることから、年度末の短い期間ではありますが、改定作業を進めております。ここからは、具体的な改定内容について説明をさせていただきます。今回に追記、修正いたしましたのは、資料上に網掛けをしております(3)の「実施目標」と裏面の(8)「進行管理(事業の評価・見直し)」についてです。

まず、実施目標ですが、調布市における重層事業の目標は複雑化、複合化した支援ニーズに対応するため、できる限り既存の各分野の制度活用を図ることを基本としながら、相談支援、参加支援、地域づくりに向けた支援の一体的な実施を通じ、支援関係機関の連携強化等を図ることとしております。

先般より国から重層事業は包括的な支援体制の構築に向けた手法の1つであるとされています。包括ケアシステムや生活困窮者自立支援制度など、分野ごとの既存制度がメインシステムであり、重層事業はサブシステムであるという考え方が示されております。メインシステムを最大限活用することを前提に、それでもなお、制度の狭間に落ちるケースや複雑化、複合化しているため、既存の連携体制では十分な支援が行き届かないケースなどに対応するため、この重層事業を活用して多機関協働による重層的な支援体制を整備することとされております。(3)の「実施目標」の2行目をご覧ください。こうした国の考え方を踏まえまして、できる限り既存の各分野の制度活用を図ることを基本とするという旨を記載しております。

続いて資料裏面の(8)「進行管理(事業の評価・見直し)」についてです。現行計画では地域福祉計画と一体的に進行管理をする中で定性評価を中心に行うことを基本とする旨を記載しておりますが、こちらでも国が示す考え方の中で重層事業については評価の取り組みを定期的に行い、見直しを検討する必要があることと評価手法についても、可能な限り定量評価を検討することがあげられていることから、これに沿うような表現に修正をしております。

なお、評価指標等の具体につきましては、国が研究成果をもとに案を示すこととされておりますが現時点では示されていないため、今後、示された指標等を踏まえ、臨機応変に評価の取り組みを実施できるよう多少柔らかい表現にしております。

今後につきましては改定後の重層的支援体制整備事業実施計画に基づき評価の取り組みを行い、進捗については適宜この地域福祉推進会議においても情報共有させていただければと考えておりますのでよろしくお願いいたします。説明は以上です。

○会長 委員の方でご質問なり内容を確認したいということがありましたらお願いします。

○副会長 確認なのですが、今の調布市の地域福祉計画の中に重層的支援体制整備事業実施計画はいつ組み込まれたのですか。

○事務局 令和6年度を初年度として、令和5年度に策定作業を進めた地域福祉計画を策定したタイミングで包含して、重層の計画も策定しております。

○副会長 そうすると、計画を作った時に組み込まれていてということですね。私の認識ではこの重層的支援体制整備事業だけを特出しにして作って、それを1冊の冊子にして、それだ

けで計画を作っているという自治体は少ないと思います。多くが地域福祉計画の中に組み込んでいるということで、地域福祉計画というか、地域福祉の一環としてやってくださいということだと思います。

これを今回、国のほうも明示をしたということで、一定の指針や通知のようなものが出たので、バージョンアップをするのか、改定作業をして令和 6 年の計画のパート 2 を作るのか、どちらになりますか。今、動いている地域福祉計画を書き換えるだけなのか、それとも計画の改訂作業をするということなのか。

○事務局 基本的に一部を改定するということですので、パート 2 を作るということではなくて、その一部分を明確化して、改定するという作業です。地域福祉計画につきましては、基本的な計画と位置付けているのですが、重層的支援体制整備事業実施計画につきましては、実施計画という位置付けですので、具体の部分について、国の示す指針に沿って、その指標を組み込むというところだと思います。以上です。

○副会長 ありがとうございます。それほど詳しいものがまだ出ていないので、今日はこのぐらいのところでして、いずれ出てくると、それに沿って書き換え、書き加えていくという感じなのですか。

○事務局 計画そのものについては、具体的にこれから改定していくということを、現時点では考えていないのですが、国の通知によって変更していくことがあります。

そのため、こうした国の指針に沿って、定量的な評価もしくは定性的な評価をしていくということを基本として、計画に記載し、具体のところでは国が示す指標にそって評価をしていくということです。大幅に考え方が変わらない限りは、今回のような変更は考えておりません。

しかしながら今後、令和 11 年度に地域福祉計画を改定しますので、その際に明らかになっている指標や、また、この実施計画についても、任意的記載事項と必要的記載事項がありますので、必要的記載事項に含まれていれば今後の改定作業の中では、より具体的な内容を盛り込んだ計画として、策定をしていくということになるかと思います。

○副会長 分かりました。要するに調布市は地域におけるトータルケアの推進と、住民主体の地域における支え合いの仕組みづくり括りという 2 つの重点施策をしてきて、その方向性というものは間違っていないと私は思うので、基本的にはあまりぶれないほうがよいかと思います。

国からこういう指針が出たから、いろいろと慌てふためいて計画を書き換えていくというようなことはあまりしなくてよいのかと思います。基本的にはぶれないようにして、この 2 つの重点施策はきちっとやっていくほうがよいですね。それは国が示す重層的支援体制整備事業の流れにも沿っていますというスタンスにしないと、かなりトーンダウンをしてしまいます。

この 10 年ぐらい、生活困窮者自立支援事業からこういう地域共生社会へということでやろうとしたんだけど、なかなかうまくいきませんでした。そして他の局からいろいろな反発が出て、だいぶトーンダウンしてしまいました。簡単に言うと、それぞれ事業をしているん

ですけれども、それを一緒にくたにして、まとめてやりましょうというものが地域共生とか包括的支援体制の話でした。ただ各縦割りでやっているものは、簡単に地域を単位にして一緒にくたにはできないです。

これはアメリカやイギリスなどはそういうものをやっているのだけれども、システムそのものを変えないといけなくて、既存のものを残したまま進めるには一定の限界があったということ、少なからずの人たちが言っていました。ただ、それでも勢いに任せてやっていて、結局、10 年ほど経ってトーンダウンして、これはあまりうまくいかないからサブシステムだというようなことになってしまいました。前はメインシステムで、これで全部、融合してやると言っていたのですが、それは無理だという話をされていて、ようやくそういう形になりました。

ただ、だからといって、ぶれないほうがよいと思うのです。調布が掲げてきた 2 つの重点施策というものは絶対間違っている方向ではないので、国がいろいろと言ってるからって、ぶれないほうがよいと思っています。すみません。長くなりましたけど、そのことはお伝えしておいたほうがよいかと思いました。

○事務局 ありがとうございます。もう一度、確認の意味で発言をさせていただきます。

この地域福祉計画に掲げた重点目標については、策定当時から現在も変わっておりません。今回につきましては、PDCA という評価のプロセスの具体的な手法について明確化するという趣旨ですので、地域福祉推進会議委員や、これまでの計画の策定に携わっていただいた委員に掲げていただいた地域におけるトータルケアの推進などの基本方針はもちろん変更するものではありません。

今、先生からも発言いただきましたが、地域におけるトータルケアというものは、この重層的支援体制整備事業が始まる以前からこの地域計画の中で長い間、目標として掲げてきたものです。重層的支援体制整備事業についても、その取り組みの 1 つと捉えておりますので、地域福祉コーディネーターの設置や、地域福祉計画が長い間、掲げた目標については、これから変更するものではありませんので、その点については確認の意味で発言をさせていただきます。

今回の計画の一部改定については、技術的な内容についての変更です。大幅な変更があった際には必要な手続きを取って、また必要な議論をしていきますので、その際には改めて委員の皆様と検討していきたいと思っております。以上です。

○会長 ありがとうございました。基本的に今の社会福祉法は地域福祉というものを上位概念にしておりまして、さらなる上位概念というものは地域共生社会です。それを社会福祉法では入れており、しかしそれは地域福祉を推進することでやりますよと言っています。そして地域福祉を進めるために包括的な支援体制を作ることになります。

これは自治体が努力義務としていて、重層というものはやるところと、やらないところがあってもよい補助金を出す 1 つの事業だというように位置付けていました。そこは変わっているわけではないので、基本的には地域福祉計画の中にその重層的な考え方を入れてやることはそれでよいのだけれども、その中身が大きく変わるというのではなくて、おそらく評価のところをもっと明確にしようということですね。

調布が今まで毎年、作っていたものは量的なものと、質的なものと、きちんと整理して数字としてもはっきり出しているのです、おそらくそのようなところではっきりしなかった部分があるので、明文化するというぐらいのものだと思います。

重層を全部にやらせるということにはおそらくならないではないかと思います。それは小さい自治体もたくさんありますから実際はもう包括的にやらざるを得ないですし、そういうところはそれをさらに進めるとはなかなかならないのではないかと思います。

ですから、国がこうしてくださいと言うところは、きちんと我々はやっていますが、国からお金をもらうためには、こういうふうに文言としてはっきりさせることが、おそらく必要になるだろうと思います。なので、その程度のことだと考えてよいのではないかと思いますので、おそらく大きな変化が出るということはないのではないかと思います。

必要があれば次の計画作りの時に議論をするということですので、今日はこれでよろしいですか。ありがとうございます。

それでは全体でご質問、ご意見がありましたらお願いします。よろしいですか。

○会長 今年度の地域福祉推進会議は今回で終了いたします。

また来年、日程などの調整もあると思います。本当にみなさん、お忙しい中ご出席をいただき、非常に活発な意見をいただきまして、ありがとうございました。

ではこれで終了いたします。